

報告タイトル（＊日本語と英語両方ご記入ください）

経済成長下のウェイト・ピッカーと相対的貧困化：インドネシア共和国ブカシ市バンタル・グバンでの 10 年間の比較調査（2013-2023）

“Waste Pickers and Relative Impoverishment under Economic Growth: The Case of Bantar Gebang, Indonesia”

氏名（所属）

佐々木 俊介（早稲田大学先端社会科学研究所）

Shunsuke (Institute for Advanced Social Sciences, Waseda University)

要旨（800 字程度）

近年、廃棄物管理分野では、ウェイト・ピッカーによるインフォーマル・リサイクルの活用が注目されている。本研究は、経済成長がウェイト・ピッカーの収入に与える影響に着目し、インドネシア共和国西ジャワ州ブカシ市バンタル・グバンの最終処分場周辺に形成されたスラム街を対象に、2013 年に 78 世帯、2023 年に 50 世帯を対象として行った構造化インタビューと 34 人への非構造化インタビューにより、ウェイト・ピッカーの収集量、収入、児童労働の変化を検討した。1 世帯当たりの月平均収集量は 126.7kg から 87.6kg へ減少したが、月平均世帯収入は約 240 万ルピアから約 261 万ルピアへわずかに増加した。これは、収集物に占めるソフト・プラスチックの割合が 78.9% から 30.4% へ低下する一方、単価の高いハード・プラスチックが 9.4% から 60.3% へ増加したためである。ソフト・プラスチックの減少には、国際市場価格の低下、中国の廃プラスチック輸入禁止、工場の操業停止、使い捨てレジ袋規制などが複合的に影響していると考えられる。この 10 年間にジャカルタの平均賃金が約 2 倍になったのに対し、ウェイト・ピッカーの収入はほぼ横ばいであり、現在ではフォーマル部門の約半分、インフォーマル部門平均の約 7 割にとどまる。両時点でもスラムによる搾取は確認されなかったことから、搾取がなくても経済成長のなかで相対的貧困化が進む可能性が示された。また、児童労働の人数にも変化がなく、家業や友人関係を通じて次世代がウェイト・ピッキングを継続する可能性がある。収入が安定しているため職業転換の判断が遅れ、貧困が世代間で継承されるおそれもある。このため、子どもの就学継続と職業訓練を支援し、他職種への移行機会を確保することが重要である。また、フォーマル・リサイクルとインフォーマル・リサイクルの統合については、環境負荷や働き方も含め、今後の検討課題である。